

2020 年度活動報告 学部授業：日本語 IV(西宮上ヶ原)

森本 郁代 (関西学院大学法学部)

佐野 真弓 (関西学院大学日本語教育センター)

秋田 美帆 (関西学院大学日本語教育センター)

1. クラス概要

日本語IVの授業目的は、学生が自分の関心のあるテーマに沿って問いを立て、文献調査とアンケート調査を実施し、分析から得られた考察と結論を発表して、最終的に 5000 字程度の小論文にまとめることを通して、アカデミックな活動に必要な日本語能力の総合的な力を養うことである。そのための到達目標として、(1) テーマ設定力を身につける、(2) 情報リテラシーを身につける、(3) データ収集・分析力を身につける、(4) 論理的思考力を身につける、(5) 文章作成力を身につける、(6) コミュニケーション力を高める という 6 つを掲げている。

2. 授業内容

日本語IVでは、水曜日と金曜日の内容が連動しているため、水・金の担当教員の連携が不可欠である。テーマの設定、プレゼンテーション、論文の添削やコメントは水・金共通で行い、論文のアウトラインと構成の指導は水曜日、アンケート項目の作成、アンケート実施と集計・分析の指導は金曜日の担当者が主に行う。

2020 年秋学期は、対面授業が一部許可されたため、対面で実施するクラスと、対面授業に参加できない事情のある学生のためのオンラインクラスとに分けて授業を行った。シラバスは基本的に同じものを使用したが、オンラインクラス用は環境に合わせて一部修正を行った。授業内容とスケジュールはほぼ例年通りだが、対面でのアンケート用紙の配布ができない、アンケート結果の集計と分析をクラス合同で行えないなどの問題があったため、Microsoft Forms でのアンケート作成と実施を行うこととし、説明用のビデオを作成して各クラスで使用してもらった形にした。また、ラーニングアシスタント(LA)を全クラスに配置し、アンケート作成と集計、分析のサポートをしてもらった。

3. 成果と今後の課題

制約の多い環境下にもかかわらず、ほとんどの学生が小論文の提出にこぎつけることができた。また、各クラスの平均点も 80 点前後と例年より高かった。その理由としては、序論、本論 1・2、結論・参考文献の途中提出の段階で評価を行うことを学生に周知したことで、中間段階で授業内のピア・レスポンスや教員のフィードバックを受ける態

勢が学生にできたことと、1月13日の修正版提出を全員に義務付けたことで、多くの学生が、教員からのフィードバックをもとにしっかりと修正を行ったことが考えられる。

上で述べたように、初の試みとして各クラスに1名のLAを配置したが、多くのLAが責任感を持って活動し、彼ら自身にとっても良い経験になったようである。来年度も引き続き各クラスにLAを配置し、日本人学生だけでなく、意欲のある留学生を積極的に採用し、受講生のロールモデルとしての役割を担ってもらう予定である。また、Microsoft Formsを使ったアンケートの作成、実施、集計は、紙版と比べてかなり時間が節約できることも分かった。今後もMicrosoft Formsの使用を継続し、学生同士のピア・レスポンス活動や教員からのフィードバックに時間を割くようにしたい。

上記は対面、オンライン共通の内容であるが、オンラインクラスに関してはピア・レスポンス活動をどのように行うかが学期中を通した課題であった。オンラインクラスはZoomを使った同時双方向型で行ったが、グループワークの様子を教員が把握しにくいという問題点がある。また、話し合いが上手くいっていないグループがあったとしても、その事に教員が気づけず時間が過ぎてしまう恐れもある。そのため、活動の自由度を制限し、進め方やコメントの観点を教員が予め指定した形で実施した。学生のコメントや修正後の原稿を見ると、ある程度上手く機能していたように思われるが、オンラインでのピア・レスポンス活動については、今後も検討を続けていきたい。また、オンラインでは、学生がアンケートの集計、分析の作業において問題に直面した際に、教員やLA、他の学生に支援を求めづらいという課題もあった。そういった課題を乗り越えるには、教員とLA間の連携と協同が鍵となった。例えば、教員とLAで担当する学生を決め、グループに分かれたうえで、学生からの質問や支援の求めに応じたり、学生への積極的な声かけを行ったりした。さらに、授業後に両者で各学生の状況を共有した。そうした教員とLA間の連携と協同が学生への丁寧な目配りや対応につながっていたと思われる。

日本語Ⅳ全体の今後の課題としては、日本語ⅠからⅢの内容を踏まえて日本語Ⅳでどのような能力・スキルを身に付け、または伸ばすのかを整理することと、それを学生にどのように意識させるかが挙げられる。また、授業設計上、授業内の活動や課題がすべて、小論文の完成という最終目標を達成するために不可欠なステップとなっていることから、途中でつまずくと小論文の完成が難しくなる。学生が行き詰まって意欲を失うことのないよう、学期を通して注意深く学生を観察し、適切なタイミングで必要なサポートを行うことができるような授業活動のあり方を引き続き検討していく必要がある。